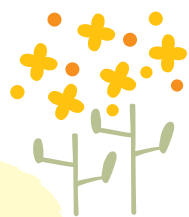


私の戦争体験



おじいさんやおばあさんが 体験した
大切な 大切な お話の数々

今も脳裏をよぎる

堺市 佐園 照子

あの戦争さえなければ、父の組み立てた大きなスピーカーと蓄音機で、近所の人たちは原っぱへ集まり、ラジオ体操をするのが朝の日課でした。

家業の縫製工場は軍需工場(※①)と化し、呉海軍(※②)の軍服(※③)を縫っていたとか。今思えば歴史の1ページとはいえ、あの空襲(昭和20年3月)を機に、生活は一変しました。

戦争が激しくなり、前後のことはよくわかりません。4歳だった私の脳裏をかすめるのは、防空壕(※④)が川のへりにあり、そこへ焼夷弾(※⑤)が落ちたため、水上警察の船に守られて川に逃げたことです。焼夷弾が降りかかるあの炎は、今も忘れることのできない一コマです。焼夷弾というのは水中でも消えることがなく燃えさかるので、そのため炎に囲まれ、その都度船を次々と逃げ延び、花園の国民学校(※⑥)へ避難しました。そして父、兄と落ち合うことができ、母は2歳の弟を背負い姉と私を連れて、3月中旬のまだ肌寒い中、着の身着のまま裸足で御堂筋を梅田まで歩いたそうです。その間焼け焦げた土人形のような死体があちこちに転がっているのを見ました。当時はその人たちを葬ることさえできず、自分の命を守るのが精一杯というのが現実だったのです。

思えば私は幼くて、その修羅場(※⑦)の記憶がうすいゆえ幸いしたと思いますが、姉から聞き胸のつまる思いで鳥肌が立ちました。これはテレビや映画の作りごとではなく、生々しいおぞましい国と国の間での殺人で、二度と繰り返してはいけないことです。

戦争と人生

松原市 T・I (77歳)

思い出すのも悲しい少年時代でした。昭和20年3月、13日夜から14日未明にかけて大阪は

※①軍需工場
武器、弾薬など軍用物の物資を製造、補修する工場。

※②呉海軍
明治以降、海軍は横須賀、呉、佐世保、舞鶴の各軍港に所属部隊を指揮・監督する鎮守府をおいていた。

※③軍服
軍人の制服。

※④防空壕
空襲の際に避難するため、掘って作った穴や建造物。

※⑤焼夷弾
火災や高熱によって人や建造物などを殺傷・破壊する爆弾・砲弾。

※⑥国民学校
1941(昭和16)年、それまでの「小学校」が「国民学校」に改められた。子どもは個人の子どもではなく、国家の子どもとみなされ、戦争に動員するための教育が徹底してほどこされた。

※⑦修羅場
はげしい戦闘の場面。

B 29 (※①) の大空襲を (※②) 受けました。

そのときの状況は、今でも脳裏にはつきりと残っています。空は雷と大きな火花、一度に何発も打ち上げられたように、真っ赤になり燃えているようでした。夜が明けると、近鉄百貨店、新世界、通天閣、日本橋、難波まで焼け野原になっていました。その日本橋では多くの遺体を目にしました。

当時、私は阿倍野筋8丁目の国道13号線寄りに住んでいました。幸いにも空襲から助かりましたが罹災者が何千人も、着の身着のまま裸足で、煙で汚れた顔そして大和川の南方に向かって、鍋や釜、洗面器、防空頭巾(※③)をもって何列にもなっていて歩いていました。本人たちは自分のおかれている立場や手に持っているものを理解できなかったのでしょう。どの顔もうつろで生きていることが不思議だったのではないのでしょうか。

それからは、空襲警報(※④)が鳴るたびに、燈火管制(※⑤)が敷かれて防空壕に逃げ込みました。電気をつけることも、ご飯を炊くこともできず、炊けた時にはおにぎりを作り、水と防空壕に保管していました。お風呂には何日間入らなかったのか今でも覚えています。時には何日間も防空壕で寝たこともあります。防空壕の中は湿気臭がして体には悪い状況でした。それでも生きていくために、あらゆる努力をしました。私個人は予科練習生(※⑥)の試験を受けました。会場は京都の会館でしたが、その場所も日時も覚えていません。2泊3日で軍人(※⑦)の指揮のもとに行われました。今でも試験の一部は鮮明に頭に残っています。このような生活が続きました。私は5人兄妹でした。空襲があるので両親と大阪市内から南河内郡に疎開(※⑧)することになりました。

人生の岐路が訪れたのは、その日6月15日でした。母は当時床についていました。その時、警報が鳴ったので4人の妹を連れて川の方に両親より先に避難しました。しばらくして警報が解除になったので、両親を探しに戻りました。父の姿がなく母の姿だけが目に入りました。近所の人々が父の死を告げてくれました。父は爆死したのです。告別式をどのようにしたのか戦時中のことでわかりません。そこから兄妹の苦労が始まりました。兄妹は別々に親類の家に引き取られ、私は宮崎県、妹は和歌山県に行きました。でも全員元気に頑張っって、兄妹全員ひとつ屋根の下で暮らすことができた時は夢のようでした。

※① B 29

長距離爆撃用に開発された米軍の大型爆撃機。無差別じゅうたん爆撃で日本の多くの都市を焼け野原にし、広島と長崎には原爆を投下した。

※② 空襲

航空機から地上を爆撃したり銃撃したりすること。

※③ 防空頭巾

空襲に備えてかぶる頭巾。



※④ 空襲警報

敵機の襲来が近づいたことを知らせるサイレン。

※⑤ 燈火管制

夜間、敵機の来襲に備え、減光・遮光・消灯をすること。

※⑥ 予科練習生

海軍飛行予科練習生。1930年創設の飛行搭乗員養成制度。

※⑦ 軍人

本人の意思で、職業として軍務についている人。召集などで兵隊にさせられた人に対していう。

※⑧ 疎開

空襲、火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散すること。

子供と戦争

堺市南区 森村 正子 (66歳)

昭和16年12月8日、ラジオの宣戦布告(※①)の放送により一般国民は太平洋戦争(※②)に入ったことを知りました。そしてこの日が私の満1歳の誕生日でした。

大阪に住んでいた私は、再々(さいざい)の空襲(くうしゅう)にあい、日々それは激しくなっていました。昭和18年、19年頃になると我が家でも疎開(そかい)を考えるようになりました。しかし家は、商売をしており店を閉じてまで家族全員が住み変えることはできなかったのです。

当時1歳の病弱(びようじやく)な弟は、母とともに田舎(いなか)へ完全に引込むことはできず、3-4歳になっていた私が、親戚(しんせき)へ縁故疎開(えんこそかい)(※③)をすることになりました。3-4歳の女兒(じょじ)が遠い田舎の親戚に一人で預けられることは、当時でも大変珍しいことでした。こうして新しい家で時々来てくれる家族に会えるのを楽しみにしながらの暮らしが始まりました。

その家は奈良県御所市(ごせし)の町はずれ、溜池(ためいけ)の前の高い石垣の上の家でした。その離れ(はな)に落ち着きました。友だちもなく、親戚(しんせき)の私と同じ年の男の子たちと地元の子ともたちと遊ぶことになったのですが、都会(とかい)からきた小さな女の子は、からかいの対象になるのに時間はかかりませんでした。いつも負け、坂の上の親戚宅に逃げ帰るのが日課(にっか)でした。離れの部屋にあった北側の窓より、1人で外の景色を眺め(なが)過(す)ごしていたように思います。

田舎の空にはB29の爆撃(ばくげき)や、空襲警報(くうしゅうけいほう)もほとんどなく、日は過ぎていきました。時々、私を心配して大阪から大きな重い荷物をリュックサックに入れ、ゲートル(※④)、国民服(※⑤)姿の祖父(そふ)が白い埃(ほこり)っぽい道を歩いてきてくれるのを、一日千秋(いちじつせんしゅう)の思いで北側の窓より期待(こた)に胸を膨(ふく)ませて待つのが、日々の恒例(こうれい)になっていました。また大阪へ祖父が帰る時、私と一緒に連れて行ってくれる時のワクワクした楽しさは忘れることができません。しかし大阪は空襲警報で家の庭に掘った、湿っぽく暗い防空壕に逃げ込んだり、夜は灯火管制で電灯を暗くしたりする日常生活でした。

※①宣戦布告
他国に対し戦争という手段を行使することを宣言・公布すること。

※②太平洋戦争
第二次大戦のうち、アジア太平洋地域が戦場となった日本と米・英・オランダ・中国など連合国との戦争。45年8月、アメリカの広島・長崎への原爆投下やソ連の参戦などによりポツダム宣言を受諾して、8月15日無条件降伏した。当時は大東亜戦争と呼ばれていた。

※③縁故疎開
空襲、火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散するために地方の親戚・知人を頼って同居させてもらった。

※④ゲートル
厚地の木綿ですねを包む服装品。



※⑤国民服
太平洋戦争中、日本で広く行われた軍服に似た男子の服装。国民が常用すべきものとして制定。

ある夏の日、私は祖父と一緒に、祖母に詰めてもらった柳行李（※⑥）のお弁当箱いっぱいのおにぎりとおかずを大切に胸に抱え、小さな体に上っ張りともんぺ（※⑦）、左の胸に名前と住所、血液型を白い布に書き縫いつけた姿で、窓から乗り降りする列車で大阪から奈良へ帰りました。こんな生活も昭和20年8月15日の終戦の日を境に終わり、その年の秋も深くなりかかった時、疎開先に御礼し、3月の大阪大空襲で焼かれた大阪の家から、尼崎へ移り住みましました。私の戦争はここで終わりましたが、この間の親と離れて過ごした2年足らずは現在の生き方に影を落としているようです。暗く狭い空間に入ることができないこと、社交的でないことなど、こんな思いをする戦争はもう二度といやだ！

失われた尊い命

藤井寺市 八田 喜久江（84歳）

昭和19年6月、サイパン島玉砕（※①）を機に戦局（※②）は日増しに悪化し、緊迫した空気が国民にのしかかっていました。そんな中、同年7月に主人に召集令状（※③）が来しました。内地（※④）とはいえ、鹿児島県の南端にある豆粒ほどの孤島、徳之島での勤務で、航空整備隊の主計（※⑤）に任命されたのです。その時、言いようのない、一抹の不安を感じたことを覚えています。

堺市熊野町に住んでいた私は、内地空襲に備えて家屋疎開にかかり、やむなく実家の澤田家へもどりました。その頃から次第に空襲が激しくなり、私たちの堺が空襲を受けたのは、昭和20年7月9日のことでした。その日、父は繊維業組合の宿直で宿院へ出かけており、また運の悪いことに、弟が高熱のために寝込んでいたところで、私はオロオロするばかりでしたが、気丈な母は弟に肩を貸し、次々と落ちてくる焼夷弾の合間を3人で必死に逃げました。仁徳御陵を目標に、東へ東へとひたすら逃げたのが幸いし、私たちは何とか助かりました。恐ろしいことに、西の方に逃げた人たちは、燃えさかるゴム工場のガスや煙に巻かれ、苦しみのあまり川や海に飛び込み、ほとんどが亡くなられたそうです。

※⑥柳行李
コリヤナギの枝の皮をはいで干したものを麻糸で編んで作った入れ物。やなぎごり。

※⑦もんぺ
もともとは東北あたりの農村の仕事着。戦争が始まると日本中の女性の普段着になった。



※①玉砕

玉が美しく砕けるように、名誉や忠義を重んじて、いさぎよく死ぬこと。旧日本軍では、戦闘に負けると判断すると、敵に突撃して倒されるか自決（自殺）を選ぶかしかなかった。

※②戦局

戦いの局面・なりゆき。

※③召集令状

戦時中の日本の兵役制度において兵として召集するために用いられた命令書。

※④内地

当時の日本では、朝鮮・台湾・樺太（サハリン）などを除いた領土を指した。

※⑤主計

会計をつかさどること。また、その係。

堺の中心部にいた父は爆風で起った竜巻で転び、顔に怪我をしたものの、何とか翌日には会えました。家族みな命こそ無事でしたが、家は全焼。やっとの思いで知人宅を訪ねてひと間をお借りし、防空壕にあらはじめ運びこんであった生活道具を運び出してきました。精一杯必死に生きることしか、頭にありませんでした。私の父は丁稚奉公から始め、ささやかな呉服商を営む根っからの堺商人でしたので、慣れない力仕事、労働に疲れ、とうとう結核にかかってしまいました。抗生物質の投与も受けることが出来ず、57歳の若さで亡くなりました。これもまた戦争の犠牲者と言えるのではないかと思います。

一方、私の主人は昭和19年10月中旬、鹿児島港より徳之島へ向けて出発したものの、たちまち敵の潜水艇(※⑥)に攻撃され、多くの船が撃沈される中、主人らの船だけが助かりました。他の船から救出された負傷者と死者が運び込まれ、その光景はまさに生き地獄そのものだったといえます。徳之島へ渡りついた後、12月に台中(※⑦)へ船で移動中、敵機の機銃掃射(※⑧)の弾が、主人の左脇から胸部を貫通しました。運よく心臓や動脈をそれていたため、一命をとり止め、宮古島の野戦病院(※⑨)へ収容されました。宮古島はやがて沖縄上陸した米国の制空権(※⑩)下に置かれ、沖縄本島をはじめ周辺諸島でも、凄惨な死闘が繰り広げられたことは映画などでよくご存知の通りです。傷のいえないまま主人は宮古島から飛行機で台湾へ送られ、そこで終戦を迎え、その後帰還することができました。

あの戦争で将来のある多くの尊い人々が犠牲になりました。今の平和はこれらの人々が礎(※⑪)となったお陰なのです。想像もできないほどの不自由さ、ひもじさを味わいました。あんな悲惨なことはもうたくさんです。戦争なんて、絶対にはいけません。

原爆を目の当たりにして―戦後62年を迎え忘れない思い出―

新宮市 堀肇 (80歳)

私は、和歌山県新宮市出身。6人兄弟の長男である。兄弟は皆、今も健在だが、私たちの青春は支那事変(※①)から太平洋戦争へと突入した大変な時代だった。

※⑥潜水艇
小型の潜水艦。潜航艇。

※⑦台中
台湾中部の都市。中部の経済の中心で、蔗糖・米・果実の集散地。

※⑧機銃掃射
戦闘機に搭載した機関銃から、目標をなぎ倒すように広角度に発射すること。

※⑨野戦病院
戦場の後方に設け、戦線の傷病兵を収容・治療する病院。

※⑩制空権
領土・国家の権益を保護するため支配された空中の一定範囲の権利。

※⑪礎
建物の土台となる石。柱石。土台石。礎石。物事の基礎となる大事なものの、あるいは人。

※①支那事変
日本の中国に対する侵略戦争に対する当時の日本の呼称。

空襲が日に日に激しくなり、新宮市も例外なく海からの艦砲射撃（※②）や、列車や橋を狙った空襲で弾丸が飛び交い、いつ死ぬかわからないほど危険な毎日だった。

昭和20年6月、普通は20歳になると入営（※③）するのだが、国が非常事態の為の繰り上げだろう、19歳の若さで『赤紙Ⅱ召集令状』が届いたのだ。「ああ、いよいよ来たか」と死を覚悟した。

8月5日、私たちの連隊（※④）に長崎への配属命令が出て、その日の夜中に大阪を出発。列車は鈍行（※⑤）で満員。私は、頭上の荷物置き場に寝転んでやつの思いで長崎駅についた。8月6日の朝のことだった。部隊は長崎駅から歩き、大浦天主堂近く、山の上の大浦小学校に兵舎（※⑥）を構えた。着くと同時に空襲に備えて、B29の通過方向を考慮に入れた防空壕の補修を行った。その壕は、両方に入り口のあるものだった。これが後になって功を奏した。

忘れもしない、8月9日北東の上空にB29の3機が見えた。なんとなく違和感を覚え、「ビラでもまくのか?」と思ったとき、真ん中の1機から『鉄の塊』が落ちた。と思った瞬間、『落下傘（※⑦）』が開いた。そして3機とも逃げるように消えた。私は、とっさに「空中で破裂する爆弾かもしれない」とひらめき、壕に飛び込み、耳と目をふさぐと同時に強烈な爆風と熱風が体を直撃した。その圧力と熱はすさまじいものだった。その時、私は休憩中で、外で原爆投下の瞬間を見たのだった。爆心地（※⑧）より4キロほど離れていたであろうか? あと1秒遅れたら死んでいたかもしれないかった。

爆発の2-3秒後、二度と爆発しないと思い、真っ先に壕を出て、『落下傘』が落ちた方を見たとき、『きのこ雲』が上がったところだった。仲間に声をかけ、暫くの間、あの不気味な色のモクモクが広がる姿を見つめた。いまだにすっかり目に焼きついていいる（戦後、映画館で観た『きのこ雲』はよく再現できていると思った）。

すぐに召集され、長崎町内の視察命令がでたが、すっかり景色は変わっていた。愕然とした。民家の防空壕は壺型が多かったので、壕内では爆風による『ショック死』と思われる死者の多いこと。入り口が2箇所あれば爆風が抜けて助かったのに…と思った。私はいろんな意味で九死に一生を得たのだ。

※②艦砲射撃
軍艦に備えつけた砲による射撃。

※③入営
軍務に就くために兵営にはいること。入隊。

※④連隊
旧陸軍部隊編成上の単位のひとつ。

※⑤鈍行
各駅停車の列車。俗に、急行に対していう。

※⑥兵舎
兵隊が寝起きする建物。

※⑦落下傘
パラシュート。絹製またはナイロン製の傘状のもので、飛行機から人や物資を投下するとき、降下速度を制限するために用いられるもの。

※⑧爆心地
原子爆弾が落とされた中心点。爆心地から半径2km以内の範囲で、広島では約22%、長崎では約28%が死亡。投下からその年12月末までの約5カ月間に、広島では約14万人、長崎では約7万人が命を奪われた。

その日から電線の張り替え作業と、周辺の民家を調べ、死体收容を行った。收容作業は、死者の手足を持って運ぶのだが、3日目位になると、皮がずるつと剥けてくるようになった。そのときの光景と匂いは表現の仕様がなほと酷いものだった。

その後私を含めた数人は長崎駅前に行った。そこには『捕虜收容所』(※⑨)と思われる建物があり、屋外に出ていた外人は原爆の直撃を受けたのであろう。皮膚が赤剥けで目を覆うほどすごいものだった。味方に被爆(※⑩)させられるなんて、なんと戦争は皮肉なものかと思った。

後でわかったことだが、大阪から長崎に向かう途中、広島駅を通過したのが8月6日6時頃。私が通過した2時間後に、あの大きな原爆が投下されたと聞かされ、血の気が引く思いだった。なんと幸運な自分であるのか……。

このことがきっかけで、私は、世の中で役立つ社会奉仕をすることを心がけています。また、この体験を伝えることで役立ちたいと考えています。

12歳の重すぎる体験

羽曳野市 藤木 清子 (74歳)

太平洋戦争が勃発した昭和16年、私は国民学校3年生だった。次第に戦時色(※①)が強まり、学校でも兵士を育てる訓練に力を入れた。凍てついた屋上での長刀練武(※②)は、痺れた素足が思うように動かず「気合が足りん」と、拳で頭や頬を叩かれた。また、重い国旗を腰につけ「頭右」(※③)の号令をかける分列行進(※④)は、日の丸を捧げ持っているのも両手が使えず、ブルマーが足元まで下がってきて困った。

3年後には本土(※⑤)への空襲が始まったため「都会の学童を田舎に疎開すべし」の軍政令(※⑥)で、大阪市此花区にある私たちの学校は、3年生以上が愛媛県西条市へ集団疎開が決まった。一輛の路面電車を出発した秋の夜更け、遠足に出掛ける気分ではしゃぐ子どもたちとは対照的に、家族は悲愴な顔で見送っていた。反抗できない軍の命令とはいえ、我が子

※⑨捕虜收容所

戦争などで、敵に捕らえられた者を入れる施設。

※⑩被爆

爆撃を受けること。特に、原水爆の被害を受けること。

※①戦時色

戦争をしている状況の表われ。太平洋戦争の敗戦の日までは、国民生活はすみずみまですべて戦争の遂行を最優先した統制下におかれ、戦争に反対する人はもとより統制に服従しないと「非国民」「国賊」などのレッテルを貼られ弾圧された。

※②長刀練武

長刀(幅広で反りの強い刀身に、長い柄をつけた武器)を鍛錬すること。

を手離す親の心情はいかばかりだっただろう。母も毎日陰膳（※⑦）を据えて、私の無事を祈りつづけていたというのを、後になって知った。

卒業までの半年、疎開先のお寺で仲間40人ほどとともに、親恋しさ、ひもじさ、髪や体に寄生するしらみ（※⑧）に泣く日々を過ごした。日課は早朝6時に鳴り響く太鼓に飛び起き、身支度、洗濯、長い廊下の拭き掃除など分刻みの作業に追われた。赤く腫れた霜焼けの手に冷水が沁み込み、飛び上がるほど痛かった。

お椀七分目に盛られたご飯は日が経つうちにさつまいも1個となり、仲間同士は芋の大きさを目をぎらつかせていがみ合った。1日にひとつ配られるみかんは、皮も焼いて食べた。近くの銭湯に行くのは月に1、2度で衛生状態が悪いためしらみが大発生し、女生徒は頭を丸坊主にされた。夜通し掻いたしらみのかみ跡は膿をもち、かさぶたになっても掻きむしるので治ることはなかった。血と膿にまみれた傷跡は、今でも体のあちらこちらに残っている。

昭和20年のお正月、地元の人たちの心配りで子どもたちは2、3名ずつに分かれ、各家庭に招待された。しかしご馳走を満喫した幸せは束の間、あとには消化不良の病人が続出した。私は1週間ほどで治ったのだが、3年生のA君は余病を併発して快復が遅れていた。「寮母さん」と呼ぶ声がだんだんか細くなり、3カ月後に8歳の短い生涯を閉じた。大阪から駆けつけた母親は、我が子の名を呼び続け一晩中亡骸を抱いていたそう。弔いの日、私たちはすすり泣きながら、お墓までの長い道のりを辿った。

平成の始め頃から、娘一家が私の疎開先だった西条市の隣り町に住むようになった。たまに私がそこを訪れていた日、孫の担任が家庭訪問に来られたのが縁で「戦争体験談」の依頼を受けた。私が疎開をしていた当時と同年代の子どもたちを前に、思い出すまま真実を語った。現代つ子たちは目をうるませ、頷き、真剣に耳を傾けてくれた。

私はこんな機会を得たことを感謝するとともに、体験を通した戦争の悲惨さを語り継がねばならないと痛感している。

※本文は原文に沿って忠実に記載しております。

※③頭右

号令（指揮官が部下に向かって指示すること）のひとつ。直立不動の態勢のまま、頭部を右に直角に向ける動作。

※④分列行進

分かれて並び、行進すること。

※⑤本土

本国。属国、領地などに対して、主な国土。

※⑥軍政令

戦時において軍司令官が発令する命令。

※⑦陰膳

旅などに出た人の安全を祈って、留守宅で用意して供える食膳。

※⑧しらみ

哺乳類の皮膚に寄生し、血液を吸う昆虫。アタマジラミは体寄生するしらみ

